

商いの新しいものさし

第36回

（株）商い創造研究所
代表取締役

松本 大地

世界一幸せな国の商店街



国連が発表した世界の国を幸せ度でランキングする「2013年世界幸福度報告書」で第1位となったのはデンマーク。以下2位がノルウェー、3位スイス、4位オランダ、5位スウェーデン、6位カナダ、7位フィンランドと北欧諸国が上位を占め、ちなみに日本は43位であった。今、ヨーロッパ各都市ではコペンハーゲン化するという新たな動きが見られる。

デンマーク

の国土面積は日本の約9分の1。人口約70万人の首都コペンハーゲンを先般視察実態調査した際、そこで目

北欧一賑わう商店街「ストロイエ」

ン、生活雑貨、レストラン、カフェなど11区界隈の範囲に約2000店が軒を連ねる。

今年、原宿にオープンしたフラインクタイガーコペンハーゲン表参道ストア、その本店はストロイエ入り口付近にあり、人気の低価格北欧スタイル雑貨ショップとして賑わう。高級陶磁器店ロイヤル・コペンハーゲンはルネッサンス様式の外観が威厳を放ち、イルムス本店は北欧スタイルの家具や雑貨を揃え、ヨーロッパ発のZARA、H&M、TOPSHOPだけでなくGAPなどアメリカのショップもこぞって一等地に出店する。

そぞろ歩きに最適なストロイエ。何故、毎日ショッピングや散歩を楽しむ人が溢れ、人は中心街に集まるのかを考えると3つのものさしが見つかった。

1つは、自転車、歩行による都市生活であること。

自転車専用道路だけで120kmも整備されているコペンハーゲンは、世界一自転車にやさしい都市に選ばれ、クルマ中心の道路・都市政策から、歩行者や自転車中心の都市づくりを国、市を挙げて推進している。中心部や都市近郊に住み自転車や地下鉄を移動手段とすることで街とのつながりが深まり、ストロイエは日常生活における交流の場になっている。それにはクルマで社会的ステータスを誇示しない国民性も影響するが、商店街がみんなの庭のようなリビングルームとして使われているからだろう。

2つには、商店街の居心地が良いこと。

「街を歩くと」はエキサイティングなラズベガスでも上海でも東京でも可能であるが、これからは「街でくつろぐ」ことが同時に求められよう。ストロイエは街を歩むだけでなく、街でくつろぐ居心地の良さが至る所にある。都市環境政策でのデザインコントロールによる歴史ある建物と現代建築の調和や、街に開かれた公共空間と商業空間の融合は街の品格を映し出す。ファストファッションの店舗であってもルネッサンス様式のクラシックな建物に溶け込むように収まり、風格ある石畳の街路には洗練されたストリートファニチャーがつけられ、ファーマーズマーケットや大道芸人の役割もヒューマンなくつろぎを演出する。そんな商店街の温もり、居心地の良さを人は求めている。

3つには、商店街に衣食住の北欧デザインが溢れていること。

コペンハーゲンの可愛らしく洗練されたインテリアや生活雑貨は、いかに暮らしを歩むかをデザインと機能性の両面で追求する。北欧の冬は長く暗いので、愛着の持てる家具や家電、生活用品は必需品であり、グローバル化の波に押し流されず独自の素材や質感ある機能美を大切に作る。ピッドな北欧カラーでつくられたオープンカフェは美しい景色を醸し出す。

歩いて暮らせる生活、そのステータスとなる商店街、そしてデザインコミュニティのようなどんな都市。街と家とつながるコペンハーゲン化には、新しい業態開発や都市づくりのヒントが内包されている。

今やパリ、ロンドンそしてお隣のソウルもコペンハーゲン化を指向し始めているのも頷ける。